

遺伝子研究者の村上和雄さんによると脳には無限の可能性があり、喜びや愛、他人の成功を喜ぶという感情をもつと活発化するそうです。

「和顔」「愛語」「讚嘆」の言葉の力を活用して、子供の無限力を引き出しませう。

【神無月】

十月は神無月。各地の神々が出雲に集まり、相談をなさる月だそうです。出雲の国以外の諸国では、神様がお留守なので神無月といいますが、出雲に限っては神有月と呼び、神在祭の神事が行われます。『奥義抄』という本に書いてあるこの説が一般的です。



また一説には、神々が集まるのは出雲でなく伊勢で、大神に新穀を供える祭の月だから「神嘗月」が正しいともいわれます。十七日は神嘗祭で伊勢神宮の大祭、宮中では賢所神嘗祭があります。各地の神々の不在はほぼ一か月で、各地ではこの神々を送り迎えする「神送り神迎え」の行事があり、その間の留守番はエビス神やカマドの神。この神がその不在の神々の代役を務めるということです。

【神嘗祭】

十月十七日は神嘗祭があります。これは、正しくは「かんにへまつり」と言い、伊勢神宮において、その年にとれた一番はじめの稲穂(初穂)を天

照大御神に奉る大祭中の大祭です。古事記によると、天孫降臨の際、天照大御神は、瓊瓊杵尊に次のような神勅を与えます。

「豊葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ、行矣。宝祚の隆えまさむこと、まさに天壤と窮りなかるべし」わかりやすくいうと、「豊葦原の瑞穂の国(稲の穂が豊かに実る国、日本)は私の子孫が治めるべき国です。私の孫(真子)であるお前が行って天の理想を地上に実現する中心者になりなさい。その尊いみ位も、国柄も永遠に栄え、天地と共にどこまでも続くでしょう。」と。

そして、この時天照大御神ご自身が、高天原でお作りになった稲穂を親しく授けられ、この稲穂を播き継いで日本を永遠に栄えさせよと仰せられました。



日本民族の主食である稲は「天の御心を地上に」という天孫降臨の御神勅とともに授けられたのです。農業によって栄えてきた稲穂豊かな国、日本。この農業起源の恩に感謝し、その年の稲が初めて穂をつけた時、喜びと感謝の心いっぱい、神様に初穂をお供えするのが、神嘗祭というお祭りなのです。

第二百二十四代 昭和天皇 御製 (昭和三十年)

神嘗祭に皇居の稲穂を伊勢神宮に奉りて
八束穂を内外の宮に ささげもちて

はるかにいのる 朝すがすがし

わが庭の初穂ささげて来む年の
みのりのいのりつ 五十鈴の宮に

これは、昭和天皇さまのお作りになった和歌(御製)です。二千年以上も、ずうっと、このように祭りを通して天皇さまは、神のことに心澄まされ、無私な心で民の幸せと国家、人類の繁栄を祈り続けてこられたのです。

世界中どこにも、こんな長い間、このような理想を貫いてきた国は他にひとつもないのです。

秋祭りは、稲の刈り入れが全て終わってから、その実りに感謝して行われてきました。

秋祭りには、産土の神様におまいりしましょう！
いろんな土地の産土神は、みな日本の国の中心の神様である天照大御神にお仕えされています。

「仕える」というのは、どういうことでしょうか。
自慢の心や責める心やさげすむ心や恐怖する心や自己の正しさのみを言いはるような心は、みな我の心(言挙げ)として、日本人は嫌ってきました。

そういう我の心を捨てて、神様の生命のままに生かされている日子、日女(神の子)として、み心のままに、無限力を表現していく無私の心を尊く思い、大切にしてきたのです。

「仕えまつる」というのは、この「無私な心」でまごころを尽す生き方です。

お祭りに行ったら、そういうまごころを尽す人になれるよう、神様にお祈り

しましょう。



和歌コーナー

つきひがい(月日貝) いろんないろがあったよ
さわったら ぎさぎさしてる ちくちくしてる
つきひがい まああるところと
しかくいところ ふしぎだな なんてかな

年長 T・Y

☆月日貝をさわったりながめたりして観察して、
おもしろかったですね。

かたつむり なぜかおそいな

ふしぎだな めだまやつのも ゆっくりですよ

小学一年 H・H

☆小さなかたつむりが、ゆっくり進んでいました
ね。目玉や角もゆっくり出しているのんびりやさんね。

かたつむり ふくろのうえから にげそうで

ぎやあとみんながおおさわぎしてる

小学一年 K・S

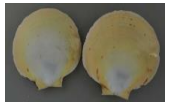
☆かたつむりが動くのをみんなながめて、おも
しろかったですね。

かたつむり あるくのおそすぎ たまらない

みんながにげろといっている

小学一年 Y・K

☆かたつむりさんも どこににげようか、とこま



ついていたのかもしれないね。

月日貝 表が赤で うら黄色

おもしろい色をしている貝だ

小学四年 H・A

☆表が赤でお日様の色。裏が黄色でお月様の色。
不思議な貝を初めて見ましたね。



月日貝を見て、金子みすずさんが作った詩です。

「月日貝」

金子みすず

西のお空はあかね色、

あかいお日さま海のなか。

東のお空真珠いろ、

まるい、黄色いお月さま。

日ぐれに落ちたお日さまと、

夜明けに沈むお月さま、

逢うたは深い海の底。

ある日漁夫にひろわれた、

赤とうす黄の月日貝。

♪心がほんわかとあたたかくなりますね♪

声に出してひびきを味わおう

今月の万葉集

万葉集 巻八 まさのはち

第三十四代 舒明天皇 じよめいてんのう 御製

夕されば ゆう

小倉の山に おぐら

鳴く鹿は な しか

今夜は鳴かず こよい な

寝宿にけらしも いね

(大意)

日が暮れて来ると、いつも決まって

小倉の山で鳴きかわす鹿の声が聞こ

えるのであるが、今夜は鳴かない。

もう寝てしまったのであろうー

※もの音一つしない無量の「静けさ」が迫っ
てきますね

今回は、十一月二十四日(土)、六階 和室です。

(文責・藤波)